命のきらめきを伝えていきたい

水中写真家　尾﨑 たまき 氏

Sea of Minamata © TAMAKI OZAKI. All Rights Reserved.

水中写真を始めたのは、短大のときにダイビングをしたことがきっかけでした。海中では同じ場所でも潜るたびに違う景色が見えます。それを形にして残したいと思うようになりました。

水俣の海に潜り始めたのは1995年です。そのころ1974年に設置された仕切網を撤去するか否かが議論されていました。仕切網というのは、水銀に汚染された魚が拡散しないよう水俣湾に閉じ込めるために設置されたものでした。

仕切網のある海のなかはどうなっているのだろう？　好奇心から潜りました。そこは想像していた「死の海」とは違って、生命にあふれた「生きている海」でした。人の手が入らず、さまざまな生きもののサンクチュアリになっていたのです。地元の方や漁師さんたちのご苦労も聞いていましたが、人間の営みの制限とは関係なく生きものが輝いている。この感動をみんなに伝えたいと強く思うようになりました。

仕切網が撤去されたあとも、水俣の海に潜っています。仕切網がなくなったことで海流が変わり、海の様子はずいぶん変化していきました。続けて潜っていると、地球温暖化が大きな影響を与えていることも実感します。南方のサンゴや、ウニの仲間のガンガゼも増え、それに伴って海藻が減ってきています。温かい季節しか見かけなかったクマノミが年中見られるようになりました。以前とは異なる光景が広がっています。

三陸の海にも潜っていますが、そこでも磯焼けが問題になっています。対策として全国各地で、鉄鋼スラグを活用した藻場再生が行われていると聞いています。私も2つの現場に潜って再生の様子を見たことがありますが、生きものを育む藻場を守るため、とても意義のある大切な取り組みだと思っています。これからの成果に期待しています。

2015年からは水俣の海でタツノオトシゴを撮影しました。タツノオトシゴはオスがメスから卵を預かって、ふ化するまで育てます。その瞬間を捉えるまで3年かかりました。さかなクンが応援に駆けつけてくれたとき、「ギョギョー！　水俣のタツノオトシゴは、普通よりも小さい気がする。新種かも!?」と話してくれました。その後、日本と韓国の生物学者によって新種のヒメタツであることがわかりました。今や水俣の海は、世界中の写真家やダイバーが訪れる撮影スポットになっています。

私は現在、東京と山梨の2拠点で活動しています。山梨の湖でもヒメタツの産卵シーンのような生きものの知られざる生態を追いかけて、命のきらめきを伝えていきたいと考えています。（談）

◉プロフィール　尾﨑 たまき（おざき・たまき）

1970年熊本県生まれ。19歳からダイビングを始め、水中写真に興味を持つ。2000年から水中写真家の中村征夫氏のもとで研鑽を積み、11年独立。水俣をはじめ三陸や動物愛護センターなど、生きものと人とのかかわりをテーマに作品を撮り続けている。著書に写真絵本『フシギなさかな ヒメタツのひみつ』（新日本出版社）など。2月末に新刊『漁師犬タロウ』（新日本出版社）を発刊。